

N  
I  
E

実 践 報 告 書

2025(令和7)年度



Newspaper in Education

群馬県 NIE 推進協議会

# Contents

ごあいさつ .....	群馬県 NIE 推進協議会会長 栗原 幸正	2
<b>自分の考えをもち、表現できる児童の育成</b>		
～新聞に親しみ、考えを広げる活動を通して～		
	邑楽町立中野東小学校.....	3
<b>対話を通して、協働的に学び続ける児童の育成</b>		
～「聞きたい」「伝えたい」を引き出す授業作りの工夫を通して～		
	太田市立毛里田小学校.....	7
<b>新聞を活用して考えを広げられる児童の育成</b>		
～新聞に触れ、親しむ活動を通して～		
	館林市立第五小学校.....	12
<b>「新聞活用を通して生徒の興味関心を高める仕掛け」</b>		
	高山村立高山中学校.....	16
<b>主体的に学びに向かう生徒の育成</b>		
～新聞を活用して、自ら考え知識や表現を探求できる～		
	沼田市立薄根中学校.....	19
<b>情報を受信し、考える素材としての新聞の活用</b>		
	明照学園樹徳中学校.....	23
<b>新聞記事スクラップによる「社会への主体的関与」の育成</b>		
～1年間の NIE 実践と新聞投稿を通じた「自分事化」～		
	群馬県立大泉高等学校.....	28
<b>「新聞を読む」ことを通じて、社会と自分とのかかわりに関心を向ける力を育む</b>		
	群馬県立玉村高等学校.....	33
<b>総合的な探究の時間を踏まえた発展的な学習としての NIE 活動</b>		
	高崎健康福祉大学高崎高等学校.....	37

## ごあいさつ



群馬県 NIE 推進協議会 会長 栗原 幸正  
(高崎健康福祉大学人間発達学部 学部長)

令和7年度は、令和6年度より開始しました ZOOM による実践校交流会を、小学校・中学校・高等学校の児童生徒の実態に合わせて、各校の NIE の実践報告の収録動画を一定期間関係者に視聴していただき、視聴者からのご意見やご感想をいただくという形に変更して実施いたしました。各種学校の時程や児童生徒の生活の状況から、当初目指した一堂に会して実践を交流するという事が現実的に難しいという事で実施方法の変更をいたしました。変更した結果、多くの NIE 関係者の方に視聴していただくことが可能となり、心のこもった激励のメッセージを子どもたちに届けることができましたことは、想定外の喜びとなった次第です。

本実践報告書では、実践交流会に参加した学校を含む9校の令和7年度の実践指定校の NIE 充実に向けた実践が掲載されております。掲載されております小学校3校、中学校3校、高等学校3校からなる令和7年度の実践校の全てが新聞と児童生徒を出合わせる空間づくりや授業づくりに多様な工夫を凝らしておられます。子どもたちがいかに新聞を手にとることが出来るかと新聞コーナーの設置に工夫を凝らした学校。また、新聞記事を活用した授業づくりに複数の教科で取り組んだり、探究学習として学級だけでなく委員会や部活を巻き込んで取り組んだ学校。もちろんこれまで積み上げてきた投稿という形で新聞への接点を模索していただいている学校も健在です。特に令和7年度の実践では、実践内容や実践後の児童生徒の変容などをいかに評価していくかという視点が強く打ち出され始めた事が印象的です。各校が、学習指導要領に明記されたカリキュラム・マネジメントを NIE 実践でも積極的に取り入れ、PDCA サイクルの視点で NIE に取り組もうとする視点が、次世代の NIE の世界を大きく開いたと言うことが出来るのではないのでしょうか。群馬県の NIE が新たな発展をしていく確かな息吹を感じる事ができる本実践報告書をぜひ最後までお読みいただければ幸いです。

本報告書の作成にあたり、これまでご協力いただきました関係新聞各社をはじめ、実践に臨まれた各学校の先生方や児童生徒、そして保護者や地域の皆様方に、心よりお礼申し上げます。

今後も、次世代を創る NIE の活動がより充実し、各学校の実態に即した教育実践が多様に繰り広げられることを願って巻頭の挨拶とさせていただきます。

# 自分の考えをもち、表現できる児童の育成

～新聞に親しみ、考えを広げる活動を通して～

邑楽町立中野東小学校 渡邊 真理

## 1. はじめに

本校は、群馬県南東部に位置する児童数248名、15学級の小学校である。群馬県立森林公園おうらの森やガバ沼などが近くにある自然豊かな地域である。白鳥が飛来する沼が近くにあることから、3学期には学校、保護者、地域の白鳥の会が一体となって白鳥を観察する「白鳥オリエンテーリング」を行っている。

## 2. 実践内容

### (1) 学校としての取り組み

#### ① 学校全体での取り組み内容

今年度は、初めて NIE 実践校として指定を受けた。研修テーマである「自分の考えをもち、表現できる児童の育成」を目指す一環として、新聞を授業に効果的に取り入れたり、新聞に触れる機会を増やしたりすることで、新聞記事の意見に対し自分の立場を明確にしながら、自分の考えをもって表現することにつなげようと考えた。

#### ② どこに新聞を置き、どのような工夫をしたのか

新聞は、授業で使う場合を除いて図書室の一角に新聞コーナーを設けた。各社ごとにまとめ、1ヶ月分を置いた。バックナンバーは、すぐ近くにまとめておいておくことで、いつでもだれでも新聞を手にとれる環境を作った。



③ 複数のクラスで使用する場合は、ローテーションをどう組んだか

本校は、教科担任制をとっており、5年生については国語の授業を一人が受け持っていたため、ローテーションは組まずにすんだ。4年生と6年生については新聞を使う授業の場合は各担任が話し合い、国語の授業が重ならないようにした。

(2) 実践事例

① 授業などでの実践事例

【4年総合】新聞づくり

国語で学習した新聞の作り方を、総合的な学習の時間で体験した福祉について新聞にして紹介した。見出しやあとがき等、今まで書いたことのなかった新聞作りに挑戦し、新聞を読むきっかけとなった。



【5年国語】

「新聞を読もう」の学習で、同じ記事でも新聞社によって、ニュースの取り上げ方が違うことを学習した。

「あなたならどう考える」の学習で、好きな新聞記事を選び、事実と自分の意見に分けてまとめ、学級で発表した。

新聞の名前	記事の内容	選んだ理由	書かれた方の思い	感想	見出し
東京新聞	石破首相が総理大臣をやめておどろいたから	面は同じだったけれど絵や石破首相の関連のコーナーで見やすさが違っていました。(見づらい)	面は同じだったけれど絵や石破首相の関連のコーナーで見やすさが違っていました。(見やすい)	朝日新聞はよくみているので見やすく感じているのかもしれないんですが東京新聞よりもみやすいです。	新聞にも見やすさや見にくさがあることがよくわかりました。他の新聞とも比べてみたいです。記事が同じでも見たところが違ったら変わることがわかりました。

掲載日 R7 年 12 月 8 日

見出し  
**知識で生まれる未来のヒラメキ  
ブラックホールは本当に穴なの**

○記事の中から「事実」を抜き出しましょう。

- ブラックホールは星の仲間重力がとても強くて、近づきすぎると吸い込まれて、光さえも外に出ることができない。
- 他の星と比べ全く光を出していない
- ブラックホールは光を出していないから見つかるのがとても難しい。

○記事を書いた人の「意見」「考え」が書かれている文を抜き出しましょう。

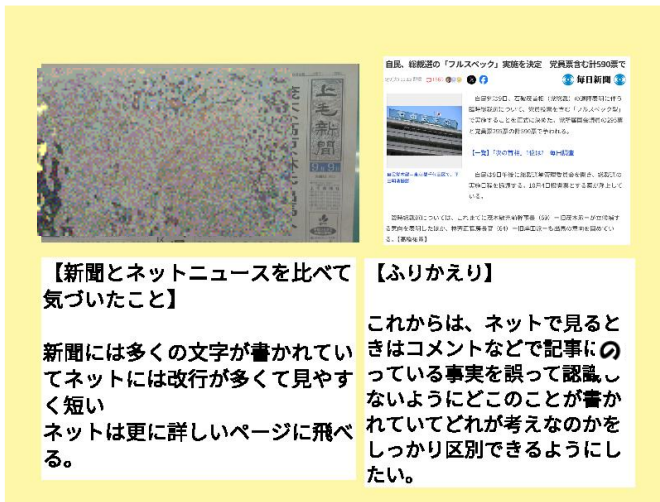
ブラックホールというくらいだから、黒い穴なんだ!と思ってしまいますよね?もちろん、私もそう思っていました。本当は星の仲間でした。光さえも重力で引っ張られてしまつと聞いて、とてもびっくりしました。今はブラックホールを直接観察することはできませんが、いつか技術が進歩して、直接観察することができるようになったらすごいですね!

○自分の考え

ブラックホールは穴が空いていてそこへたくさんの物や人が吸い込まれてしまつても怖いものだと思っていました。けれどもこの新聞を読んでみて私が考えていたことと全く違う予想外のことが書いてあることにも驚きました。そして一番驚いたこととして、とても印象的だったことはブラックホールができるまでです。星の寿命が来て、大爆発をおこし、ブラックホールになるところです。なので短い記事でたくさんを知ったのもっとブラックホールについて調べてみたいと思いました。

【6年国語】

「インターネットでニュースを読もう」の学習でニュースサイトと新聞の記事を比べた。実際にニュースサイトにアクセスし、興味を持った新聞記事とネットニュースとの比較をした。



**【新聞とネットニュースを比べて気づいたこと】**

新聞には多くの文字が書かれていてネットには改行が多くて見やすく短い  
ネットは更に詳しいページに飛べる。

**【ふりかえり】**

これからは、ネットで見るときはコメントなどで記事にのっている事実を誤って認識しないようにどこのことが書かれていてどれが考えなのかをしっかりと区別できるようにしたい。

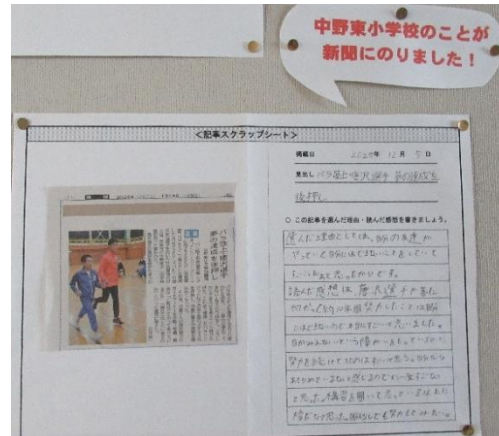
※9月9日付上毛新聞

② 児童に NIE に興味を持たせるための工夫

図書委員会で、新聞に興味を持ってもらうためにどうしたらいいかを話し合い、図書室廊下の壁面に NIE コーナーを設置した。図書委員一人ひとりがおすすめの新聞記事を選び、記事の簡単な説明と自分の意見を書いた物を掲示した。

(新聞記事を決め、意見を書いている図書委員の様子)





※12月5日付上毛新聞

### (3) 実践前後の変化、実践の感想、今後の課題

#### ① 児童はどのように変わったか

新聞に興味になさそうな低学年の児童が、図書委員会の掲示に興味を持ち、新聞を読んでもよという気持ちになった。高学年の児童も何種類もの新聞が図書室にあるので、読み比べをするようになった。新聞は漢字が多いので、子ども達から嫌煙されがちだが、身近にあることで「読んでみよう」と手に取る児童が増えた。

#### ② 児童がNIEについてどのような感想を持ったか

図書委員の児童は、「NIEの活動をしてみて、ふだん新聞を読んでいないけれど、新聞を読んでいろいろなことが書いてあるのがわかりました。記事の書いてあることをまとめて自分の感想を書いて廊下にはったら、低学年の子もみていてうれしかったです。もっと学校みんなに新聞のことを知ってほしいと思ったので、図書委員で新聞を使った取り組みをしていきたいです」と言っていた。

#### ③ 実践者の感想

数社の新聞提供を受けたことで、5年生の国語の新聞記事の読み比べがしやすかった。通常用意していたのは2社だったのが、4社の新聞の比較ができたことで、新聞社によって記事の違いがあることが、よりわかりやすかった。

子ども新聞の提供も受けたことで、低学年の児童も読みやすい新聞があることに気付き、新聞を読むきっかけになった。新聞への興味関心が高まってよかった。

#### ④ 反省点や課題となる事項

授業で取り上げていて質問が多かったのが、新聞の独特の言い回しだった。例えば、アメリカ合衆国は「米」と書くなど、児童が知らないため、語句の解説から始めた。新聞記事を読ませる前に、新聞でよく使われる国の表現や、新聞の読み方を教えてから学習しないといけなかったと思った。また、熟語が多く使われているので普段聞き慣れない表現も多く、意味調べも必要で時間がかかるのが課題である。

# 対話を通して、協働的に学び続ける児童の育成

～「聞きたい」「伝えたい」を引き出す授業作りの工夫を通して～

太田市立毛里田小学校

## 1. はじめに

本校は、群馬県の東部、太田市の北部に位置する、児童数462名、21学級の小学校である。本校の教育目標は「明るく心豊かな子」「よく考え進んで学ぶ子」「ねばり強くじょうぶな子」とし、「やさしく、かしこく、たくましく」生きていく児童の育成を目指して、教育活動をおこなっている。

## 2. 学校としての取り組み

学校教育目標の具現化に当たり、本校の研修テーマを「対話を通して、協働的に学び続ける児童の育成～『聞きたい』『伝えたい』を引き出す授業作りの工夫を通して～」と設定している。本研修を進めるに当たり、課題を正しく理解する読解力や課題に対する意見や考えをもつ力を向上させる必要性を実感してきた。

そこで、NIE実践指定校となった今年度は、児童が「新聞に親しみ、新聞に関心をもつ」ことから実践を進めることとした。NIEを各教科や総合的な学習の時間に取り入れて、新聞記事を読んだり、学んだことを新聞にまとめたりする活動を中心に、児童の『聞きたい』『伝えたい』を引き出せるよう授業作りを工夫してきた。

実施学年は4～6年としてスタートしたが、1～3学年でも可能な範囲で取り組むこととした。

### 【新聞の掲示】

高学年児童が日常的に目に触れられるよう、高学年フロアにNIEコーナーを常設した。9月から12月まで7紙の新聞を掲示し、直接手に取って読めるようにした。1週間分を新聞社ごとにファイルボックスに整理して掲示した。バックナンバーも気軽に手に取れるように、掲示場所のすぐ下に置き場所を確保した。

掲示板には、4～6年生の新聞作品を掲示し、他の学年の児童も読むことができるようにした。



【新聞社のワークシート】

5・6年生では、有料版のワークシートを印刷し、朝学習や国語の授業のなかで、継続して取り組んできた。ワークシートは、NIE 担当がダウンロードし、教員の共有フォルダに保存し、各学年の担当者が印刷して児童に提供した。取り組んだワークシートはファイルに綴じ、学習の積み重ねを実感できるようにした。



3. 各学年の実践・成果

【4年生】


実施時期	2 学期
教科・単元名	国語「集めたざいりょうでわかりやすく伝えよう 作ろう学級新聞」総合的な学習の時間「バリアフリーってなあに」
内容	<p>【国語】 新聞の作りや構成を学ぶために、新聞の1面にいくつの記事が、どのように配置されているか、実物の新聞を使って調べる活動を行った。また、見出しの工夫について気づいたことを発表し、全体で共有した。</p> <p>【総合】 国語の時間に学習したことを生かし、総合的な学習の時間では、「バリアフリー」に関連したテーマで、興味をもって調べたことを一人一人が1枚の新聞にまとめ、発表した。</p>
手立て・工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語では、記事ごとに線で囲むことで、一つの記事に見出しや写真などが含まれていることに気付けるようにした。</li> <li>・新聞の書き方に慣れるため、「清掃センター見学」、「音楽学習発表会」、「校外学習」など、各行事のミニ新聞を作る活動をくり返し設定した。</li> <li>・総合的な学習の時間に作成した新聞を互いに読み合い、よくできたところなどを伝え合う時間を設けた。代表作品をNIEコーナーに掲示し、他学年の児童にも見てもらえるようにした。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段、新聞に触れる機会が少ない児童も多いため、興味深く新聞を読んでいた。新聞の読み方を知り、「新聞っておもしろい」という声が上がった。</li> <li>・テーマや分量を絞ったミニ新聞では、書きたい内容を選んで、簡潔に表現しようとする様子が見られた。</li> <li>・「バリアフリー新聞」作りでは、調べたことと感想を区別して新聞にまとめることができた。仕上げた新聞を学級に掲示することにより、いろいろなまとめ方や、考え方に触れることができ次の活動への意欲を高めることができた。</li> </ul>



【5年生】

実施時期	2学期
教科・単元名	国語「物語の魅力をはがき新聞にして伝えよう」総合的な学習の時間「世界の国々を調べよう」
	<p>【国語】</p> <p>「大造じいさんとがん」では、主人公が雁との戦いを通して、心情がどう変容し</p>
内容	<p>ていくのかを読み取り、物語の魅力を新聞にまとめた。単元の最後には鑑賞会を開き、児童同士作品を見合う活動を設定した。その中で、分かりやすい新聞作りのポイントについて児童同士で交流し、全体で共有した。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>【総合】</p> <p>「世界の国々を調べよう」では、自分の興味をもった世界の文化についてタブレット等を使って調べ、ワークシートにまとめた。まとめた情報は新聞にして整理し、単元の最後にはクラスで伝え合い、感想を共有した。</p>
手立て ・工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国語では、単元の終盤に新聞にしてまとめることを常に全体で確認し、そのために自分たちは何を読み取る必要があるのか、物語の魅力は何なのか、意識しながら読み進めてきた。</li> <li>・新聞にまとめる際には、読み手に伝わりやすい見出しの書き方や、一面の配置の仕方などを教師の作品例や動画を見ながら考えた。</li> <li>・単元の中盤では、児童同士で新聞を見せ合い、互いの良いところや今、困っているところなどの情報を共有し、その後の活動に生かせる時間を設定した。</li> <li>・完成した児童の新聞を例として、どんなところが良いか話し合い、自分の新聞作りにも生かすことができるようにした。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞の書き手として活動したことで、普段とは違う視点で情報を整理したり、文章にまとめたりすることができていた。</li> <li>・総合では、調べた情報を鵜呑みにするのではなく、様々な角度から必要な情報を収集し、読み手に分かりやすい言葉で新聞に書きまとめている様子が見られた。</li> </ul>

【6年生】

実施時期	3学期
教科・単元名	総合的な学習の時間「戦争から学ぼう」
内容	<p>戦争をテーマに、歴史的事実や当時の人々の生活、戦争がもたらした影響などについて調べ学習を行った。インターネットでの調べ学習を中心に、「なぜ戦争は起きたのか」や「戦争は人々の暮らしにどのような影響を与えたのか」、「今の時代と比べて何がどのように変化してきたのか」などといった問いをもとに探究を進めた。</p> <p>学習のまとめとして、各自がテーマを設定し、新聞形式で表現する活動を行った。新聞制作に先立</p> 
	<p>ち、新聞記者を招いての講演会を実施し、「新聞ができるまでの流れ」「事実と意見の区別」「写真の役割」などについて学んだ。</p> <p>その後、構成を考え、見出し・リード文・本文の順で記事を作成した。完成後は、互いに読み合い、それぞれの表現のよさを味わう活動を取り入れた。</p>
手立て ・工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実社会で活躍する新聞記者の講話を取り入れ、学習への動機付けを図った。</li> <li>・実際の新聞記事を教材として提示し、構成や表現方法を具体的に理解させた。</li> <li>・見出しを複数案考えさせ、もっとも伝わる表現を選択させた。</li> <li>・相互評価の時間を設定し、「読み手に伝わるか」という観点で助言し合う場を設けた。</li> </ul>
成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・戦争を過去のできごととしてではなく、現代社会と結び付けて考える記述が多く見られた。</li> <li>・新聞という形式にまとめることで、情報を取捨選択し、構造化する力が高まった。</li> <li>・「伝える相手」を意識した文章表現に挑戦する姿が見られた。</li> <li>・新聞記者の講話が強い動機付けとなり、主体的に学習に取り組む態度が育成された。</li> <li>・完成した新聞には、「平和は当たり前ではない」、「自分にできることを考え続けた」といった記述が多く見られ、知識理解にとどまらない内面的な成長が伺えた。</li> </ul> 

### 3. 来年度に向けて

・新聞を読むことの少ない児童にとって、手軽に手に取れるところに新聞を掲示できたことは、児童が新聞への関心を高めることにつながった。今後は記事をじっくり読んだり、継続して読んだりできるよう、児童への新聞の提供方法を工夫していきたい。

・新聞記者による講話は児童が新聞を作るに当たって、大変効果的であった。来年度は、早い時期に、他学年にも範囲を広げて、講演会を開催できるように計画していきたい。

・今年度は有料版ワークシートを通じて、記事を読む経験を積んできた。今後は、児童が興味ある記事を紹介する活動や、教師が新聞記事の中から記事を提示して意見を交流する活動など、学習活動のバリエーションを増やしていけるよう、新聞を活用した学習活動を工夫していきたい。

# 新聞を活用して考えを広げられる児童の育成

—新聞に触れ、親しむ活動を通して—

館林市立第五小学校 高橋巧

## 1. はじめに

本校は、群馬県東部、館林市の東側に位置する、児童数256名、14学級の小学校である。つつじが岡公園や城沼などがある自然豊かな地域である。また、コミュニティスクールとの連携で、学校、保護者、地域一体となって行う学校行事が数多くある。今年度は、NIE実践2年目となり、新聞を活用して、児童の考えが広げられるように実践を行ってきた。

## 2. 基本的な立場・考え方

新聞を教材の宝庫として考え、教育活動を充実させる手段として、可能性を伸ばしていくものとして活用していく。ただ読むだけではなく、新聞にかかわる人・もの・ことを対象にして、広く捉えていく。授業だけではなく、新聞にかかわる機会を増やして、新聞をより身近に感じるものになるようにしていく。学校、保護者、地域など、児童を取り巻く環境に、新聞を組み込んでいけるように、日常生活の中でふれあう時間を増やしていく。

## 3. 実践の概要 こども新聞の活用と新聞コーナーの設置

### (1) 新聞に触れる

NIE 実践指定校に認定されると、実践者の数に応じて、朝日、毎日、読売、日経、東京、産経、上毛各社の新聞を無料で購読することができる。本校では、その際に、銘柄をこども新聞にして、1～3年生、4～6年生と対象を分けて新聞コーナーを設置した。場所は、多くの児童が利用する図書室前と高学年の教室前と2箇所を設置した。児童自身が読みたいと思う記事を文字の量に抵抗感なく、ふれることができるようにした。休み時間や授業など、さまざまな機会を活用できるようになった。図書室には、今までのバックナンバーが置いてあり、そこから読みたい記事を探すこともできる。



**3階 NIE コーナー:** 毎日届けていただいている新聞を新聞社毎に並べている。NIE担当教諭が興味をもった記事、館林にゆかりのある記事、スポーツ記事などのタイムリーな記事には印を付けて子どもたちが興味をもてるように工夫した。

**2階 NIE コーナー:** 学校司書教諭が、児童向け新聞を子どもたちが手に取りやすいように、毎日並べてくださった。

図書室 NIEコーナー：月ごと、新聞社ごとにバックナンバーを保管しています。第5学年の国語【新聞を読もう】では、子どもたち一人一人が新聞記事を読み、構成や特徴を知ったり、考えたりするために、このバックナンバーが欠かせない。

今年度は、『新聞で教育を』をテーマに掲げNIEコーナー等に右写真の掲示物を添付した。NIEは、アメリカで始まり、日本では1985年に提唱された。新聞は、出来事に対して複数の目で精査されているので、信頼性の高いメディアである。いかに学校教育に取り入れていくかが今年度の本校における課題にもなっている。



## (2) 授業での活用

第2学年の図画工作【どんどん かわるよ 新聞紙】では、新聞に触れねじったり、裂いたりしながらどんなことができるか考える活動を行った（右写真）。新聞の手触りなどを感じながら、変化させることを楽しむものだった。くしゃくしゃに丸めたり、小さく裂いたものを投げたり、さらには、床に敷いて自分のお部屋を作ったりと様々な活動が見られた。使用した新聞紙は、同じく第2学年の図画工作【ぎゅっとしたい！わたしの『お友だち』】で使用した。年度末にとったアンケートでは、新聞の授業が楽しかったと答える児童が多かった。



第6学年の国語【構成を考えて、提案する文章を書こう】では、一人一人が新聞を手に取り、テーマに沿った情報を記事から抜き出したり、提案文を書くための文章構成の記事を参考にして考えたりする活動を行った（右写真「国語の様子」）。

第4学年の理科【夏の星】で宇宙飛行士の仕事内容と絡めながら、考えを広げられるような質問内容を考えそれに回答できるようにした。第6学年の理科【大地のつくり】で地層や地震の学習を振り返りながら回答できるように工夫した。新聞記事をデータ化させてもらうことで同じ記事を同じ時間に活用することができた。（下写真「デジタル資料①」「デジタル資料②」）



**NIE学習**

**デジタル資料①**

- ①宇宙食にあったらいいと思うものは？
- ②自分の夢を叶えるために必要なことはどんなことだと思いますか？
- ③今まで、あなたが読んで面白かった本はありますか？

**NIE学習 デジタル資料②**

- ①ハワイは1年に  ずつ日本に近づいている。
- ②ハワイに泳いで行けるとしたら、あなたは行きますか。
- ③日本に近づいて来てほしいものはありますか？ある人はそれは何か教えてください。

第4学年の回答集計結果

1 宇宙食にあったらいいなとおもうもの	2 自分の夢を叶えるためにひつようなこと	3 今まで読んだ本で楽しかったもの
1位：ラーメン	1位：努力	ドラえもん学習シリーズ クイズの本 学校の七不思議
2位以下 いちご・野菜・肉・すし	2位：あきらめないこと 3位：みんなからのアドバイス	

夢を叶えるためには【努力】が必要だと回答している児童がとても多かった。また、宇宙食にあったらいい物は既に実用化されている物も多くあるようだが、新たな宇宙食を開発していくいいきっかけになればと思いを馳せた。

第4学年の国語【秋の楽しみ】(右写真)、第6学年の【秋の深まり】では、子どもたちが秋の楽しみを思い思いの言葉を用いて、俳句で表現した。ゲストティーチャーとして、俳句のプロをお招きして、友だち同士で俳句を共有し、楽しんで『句会』(右写真)を行った。俳句は毎月新聞社に投稿して、新聞に掲載されることでさらに意欲が高まっていた。



(3) 投稿

本校では、月1作文、週末俳句に取り組んでいる。毎回、作文のテーマとなるものを提示し、条件を設けて書いている。次ページの用紙が、課題を児童に出す際に配っていたものだ。条件は毎回ほぼ変わらないので、慣れてくると、この条件が当たり前のようになり、文章で表現することが楽しくなってくるようだ。また、書くためのヒントに沿って、文章の構成を考える児童も多い。作文のできるようになったことを授業の中でも活用し、文章を書くことに抵抗感がなくなっていくことは、新聞をきっかけにして、考えを広げ、自分の考えを表現したいと思う児童が増えたといえる。俳句についても同様に、動をより深い内容にするために、四季ごとにゲストティーチャーをお呼びして、句会を催した。最初の時にはどのようにしてたった十七音の中に考えを入れるのか、迷う児童が多かったが、続けていくこと

九月二十七日(金)の作文課題 ↓ 九月三十日(日)に作文用紙にて提出

「タイムマシンがあったら、未来・過去・どちらに行きたい。」という題名で、書きなさい。ただし次の条件を守りなさい。

条件

1. 字数は、四〇〇字程度(フリー由緒を二ページとし、②を二ページとす)
2. 題名と名前を、決められた所へ書き、(下線を参照し)
3. 原簿用紙の使い方のルールを守る。
4. 三つ以上、段落を作る。ていねいな字で書く。
5. 何か具体的なエピソード(体験したこと)をいれる。

「書くためのヒント・書く内容」

①タイムマシンがあったら、未来と過去のどちらに行きたいですか？  
未来と過去、選んだ理由を書きましょう。  
どんなことをしてみたいですか？  
現在と比べて、できるだけ具体的に、分かりやすく伝えてみましょう。  
今の自分の気持ちも、ことばにして、伝えてみましょう。

読んだ人が、興味がわくような、具体性のある文章を目指して頑張りましょう。

文章の構成、書く内容を、良く整理してから、スッキリと読みやすい文章を心がけてみよう。

1マス空けて、ここから本文を書き始める。

題名は、ココに書く。

名前を、ココに書く。

〇字

で、どんどん言葉の工夫が見られるようになった。

句会では、名前をふせて投票をする。そのため、書かれた俳句を読んで、どんなことを感じるか、自分自身で考えなくてはならない。そのため、お互いの俳句を見合う目もこえていき、どんな工夫がされていてどのような想像が広がるのか、理由を言える児童も増えていった。優秀賞や佳作に選ばれるために、言葉選びを何度も再考している様子に驚いた。さらに、このような学習活動を行い、新聞への投稿を続けた。自分の書いた作文や俳句が新聞に掲載される教育的効果は、非常に大きい。子どもたちの大きな自信になり、自己肯定感を高め、学習意欲の向上につながる。また、保護者や祖父母等の喜びを通して、会話のきっかけ作りにもなる。家族の中でもその話題で話がはずんだ。

#### 4. 実践の感想と今後の課題

NIE 指定校最後の年となり、前年度の活動を引き継ぐとともに、反省点を生かした活動にするということで年度当初は試行錯誤の連続だった。4 月当初は、廊下の壁に子どもたちが興味をもちそうな新聞記事を掲示して、少しでも新聞に興味をもてるように工夫したり、NIE コーナーを特別教室にも拡大してみたりと、如何にして新聞に触れる時間をたくさん作っていくかを考えながら日々を過ごした。新聞と ICT を融合させることで、同じ記事を同じタイミングで見たり、読んだりすることができるので、考えを共有するのにもとてもよかった。

また、複数の新聞社の記事を見られることは、1つの事象に対して様々な視点から多角的に読み取れるので偏った考えになりにくいことも NIE 学習のよさだと感じた。実践を通して、新聞を教材と見るのではなく、何か新しいことを知ることができる媒体として、子どもたちの中に浸透していったことが大きい。新聞を手にする機会が増えるだけで、多くの文章にふれ、そのたびに自分の頭で考え、友と意見を交換し、考えを広げ、学びを自ら切り拓いていく力がついていった。この新聞を教育活動の中で活かしていくことの利点をさらに多くの先生方に実感してほしいと考える。また、多くの学校行事の中で、新聞などの取材を受けることで、瞬時に自分の感想を伝えることもできるようになった。そして改めて、地域の文化財の大切さにも気付くことにつながった。

# 「新聞活用を通して生徒の興味関心を高める仕掛け」

高山村立高山中学校

## 1. 学校全体での取り組み ～学校活動全体で活用～

本校では、NIE 実践校として2年目を迎えた。本校では、全国学力・学習状況調査の結果、3年生は、新聞を全く読んでいない生徒が82%いた。他学年もアンケート結果で同じような結果になり、本校の生徒は新聞を読む機会が極端に少ない実態があった。そこで、様々な活動の中で生徒が新聞を手にする機会を増やし、新聞に親しみを持ち、様々なことへの興味関心が高まることを目指し、本年度の取り組みを行った。

本年度の新聞活用は、教師一人一人が各校務分掌でアイデアを出して、実行していった。

## 2. 新聞設置の仕掛け ～気軽に新聞を手にする工夫～

新聞を設置したのは、「集いの広場」という集会等を実施する、多目的に使用できる教室に設置した。

「集いの広場」は生徒玄関から教室へ向かうのに生徒が必ず通る場所に位置している。登下校の際に、必ず生徒が新聞を目にすることができた。

また、前年度の反省を生かし、新聞を置いた場所の前に、机を設置した。机を設置することにより、生徒が新聞を広げやすくなったり、新聞から記事の内容を記録しやすくなったりした。



## 3. 実践事例

### ①全校生徒への仕掛け

生徒が新聞に興味を持ち、新聞を手にとることができるよう、新聞記事の切り抜きを掲示した。不定期ではあるが、教頭が新聞の記事から生徒が興味をもちそうな話題を選んだ。例えばある新聞から「しつもんドラえもん」や「毎日ことば」のような小さな記事でも生徒にとって豆知識となるような記事を掲示した。掲示場所は、生徒玄関から教室への廊下で、全校生徒が毎日必ず通過する場所を選んだ。

多くの生徒が立ち止まり、掲示された新聞記事を見る様子が見られた。



【新聞コーナーの前に設置した机】

## ②英語での仕掛け

英語では、英字新聞の「見出し」を活用し、英語への興味関心が高まるような掲示を実践した。

英字新聞の見出しは、限られた新聞のスペースの中で特別なルールで短縮や簡素化されていることがある。新聞の見出しを見て、新聞の特別な表現に興味をもった生徒が多かった。さらに、今、話題になっているニュースが英語ではどのように表現されているのか、どんな表現で報道されているのか興味をもった生徒も多かった。

ある日の英字新聞の見出しは、「Intel public-private efforts launched for economic security」であった。このままでは生徒にとって分かりづらいので日本語訳として「経済安全保障に向けた国際的

な官民共同の取り組みが始動」を記事の下に掲示した。また注釈として「Intl=Internationalの略 国際的な」を追加し、生徒が英字新聞に興味をもつよう工夫をした。

また、生徒が英字新聞を読解しやすいよう、英字新聞の見出しを読み解くコツを「英語ニュースの読み方（見出し編）」として新聞記事の隣に掲示する工夫をした。

特に、冠詞や be 動詞、助動詞が省略されていることへの生徒の驚きが多く、学習したことだけでない英語表現に興味をもった生徒も多かった。

場所は、英語教室の入り口に掲示し、英語の授業に訪れる時には必ず生徒が目にするよう工夫した。

英語ニュースの読み方（見出し編）

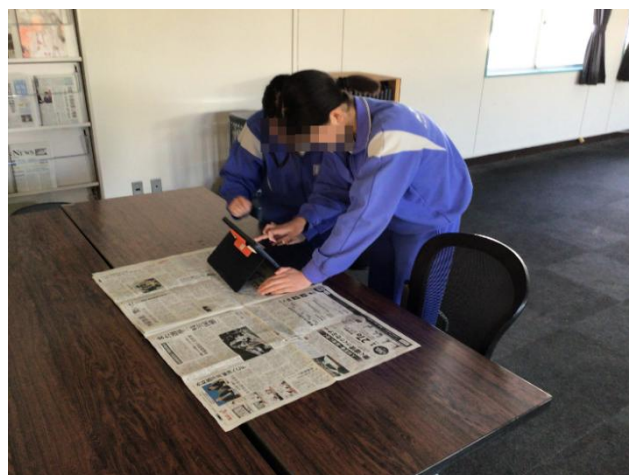
- ◆ **Headline（見出し）**とは、**新聞記事の上にある短いタイトル**のことを指します。英字新聞の見出しは、特別な書式で書かれています。
- 1) **短く、簡潔**  
ニュースの見出しは、読者が記事の内容を素早く理解できるようにするために、情報を短く簡潔にまとめることが求められます。見出しは読者の目を引き、記事を読むかどうかを決める重要な要素です。
- 2) **名詞だけ**  
見出しの中には、動詞を省略して名詞だけを並べたものがあります。見出しをさらに簡潔にし、主要な情報を強調するための方法です。このような見出しは特に大きなニュースや重大な出来事を報じる際に使われることがあります。
- 3) **冠詞・be動詞・助動詞の省略**  
冠詞の“The”とbe動詞の“is”が省略されたり、限られたスペースを最大限に活用するために、助動詞や不要な動詞が省略されたりすることも多いです。見出しが短く簡潔になり、読者の関心を引きやすくなります。
- 4) **過去のことも現在形で**  
ニュースをより緊急性かつ即時性のあるものとして伝えるため、見出しでは現在形が使用されることが多いです。過去の出来事でも、現在形を使うことで、読者に対してその出来事が今まさに起きているかのような印象を与えることができます。
- 5) **今まさに進行中のことは現在進行形で**  
現在進行形の見出しは、出来事が今まさに進行中であることを強調し、読者に臨場感や緊急性を伝えるために使われます。

### 【英語教室前の掲示】

## ③学級での仕掛け

1年生では、帰りの学活で日直のスピーチの時間を設けた。生徒の視野を広げるため、スピーチは、話題を新聞記事から探し、自分なりの考えを付け加えることとした。半ば強制的ではあるが、昼休みには生徒が新聞を読む機会が増え、社会情勢に目を向け、自分なりの考えをもつ良い機会となった。

また、3年生では、各新聞社の学習用ワークシートを用いて、世の中のタイムリーな話題に触れながら、自分の考えを表現する取り組みを実施した。主に、朝の始業前の時間を使い、限られた時間の中で担任が用意したワークシートに自分の考えを記入した。入試を控えた生徒にとって面接対策としても有効であった。



【日直のスピーチの内容を探す生徒】

### 3. 実践の評価と課題

#### ①全校生徒への仕掛け

- ・不定期で実施したが、記事選び、掲示をする教頭には負担があった。各教科担当が自主的に記事を探すことができればよかった。

#### ②英語での仕掛け

- ・生徒にとっては、英語の時間の前に必ず英字新聞を目にすることになり、英字新聞の表現を必ず見るようになった。
- ・生徒にとって、英字新聞の見出しを見る機会が少ないので、英語に関心を持つ良い機会になった。

#### ③学級での仕掛け

- ・半ば強制ではあったが、日直が交代で新聞からスピーチの内容を探したため、新聞を読む機会が増えた。
- ・今後は、生徒に活用方法を検討し、生徒が自主的に新聞を活用できる仕掛けができると良いと感じた。

#### ④その他

- ・本年度は、先生方が自主的に新聞の活用方法を考えて、各自で実践した。様々な立場で、生徒の興味関心を高めるための新聞活用を考えてもらった。結果、管理職として、各教科担当として、学級担任として様々な立場で新聞活用を実践することができた。
- ・場所や掲示方法を先生方が工夫した結果、生徒が新聞を手にする機会が増えた。
- ・生徒に新聞の活用方法を考えさせることができなかった。生徒が新聞を手にするだけでなく、生徒が自主的に活用できるようになるとさらに新聞活用の効果が期待できると感じた。

# 主体的に学びに向かう生徒の育成

～新聞を活用して、自ら考え知識や表現を探究できる～

沼田市立薄根中学校 教諭 佐藤 尚樹

## 1. 実践の概要

本校は、NIE実践校として指定を受け、2年目の実践を行ってきた。

- (1) 技術科での実践
- (2) 社会科での実践
- (3) よむYOMUワークシートの実践

## 2. 新聞の置き場と整理の方法

新聞は7月～3月までの間、2階渡り廊下の一角に閲覧コーナーを設けて3か月ごとに新聞社を変え、毎日3社の新聞を配置した。(全9社)見出しが見えるよう新聞社ごとに置き、群馬関連の記事や、中学生が関心をもてるような記事は赤枠で囲み、同じ事柄を扱った記事は緑の枠で囲み比較できるようにし、興味感心がもてるよう工夫した。また、ホワイトボードを活用し、今日のニュースのポイントを定期的に更新し、活用した。



## 3. 実践内容

### (1) 授業での活用

- ①単元名「エネルギー変換の技術の原理・法則と仕組み」 Cエネルギー変換の技術
- ②単元の目標

エネルギー変換に関する基礎的・基本的な知識を習得するとともに、エネルギー変換に関する技術が社会や環境に果たす役割と影響について理解を深め、よりよい生活や持続可能な社会の構築に向けてエネルギーに関する技術を適切かつ誠実に評価し活用する。

### ③指導方針について


- ・国内外のエネルギー問題、社会問題、環境問題への興味を高め、主体的に学習に向かわせるために、新聞記事を活用したり、新聞社の編集委員との連携を図ったりする。
- ・調べたことをもとに話し合いをする場面において、生徒たちの考えが一方に偏ってしまった場合に、教師や外部講師が書籍や新聞等の資料を紹介し、多様な視点で話し合いが深まるように支援する。

### ④本時の学習

#### (1) ねらい

今までの学習を振り返り、新聞記事・書籍等の資料や外部講師の話をもとに安全面・安定供給面環境面・経済面の視点で見極め2030年の日本の発電電源構成(エネルギーミックス)を考える。

(2) 展開 ●予想される生徒の反応

学習活動	時間	指導上の留意点及び支援
<p>1. 前時までの活動を振り返る。</p> <p>●電気エネルギーが光エネルギーに変換された。</p> <p>●白熱電球は大部分が熱に変換され、損失が大きい。つまりエネルギー変換効率が低い。</p> <p>2. 本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>&lt;めあて&gt; 持続可能な社会の構築のためのエネルギーミックス(発電電源構成割合)について考えよう。</p> </div>	<p>5分</p>	<p>○今までの学習を振り返らせるために、照明機器の実験の様子を記録した写真・実験器具等を提示する。</p> <p>○社会からの要求、生産から使用・廃棄までの安全性、出力、変換の効率、環境への負荷や省エネルギー、経済性に着目し、発電電源構成を再度考えることを伝える。</p>
<p>3. 社会情勢の影響によるエネルギー価格高騰などの経済面での課題や万が一の事故が発生した場合の被害の深刻さなどの環境面・経済面・社会面での課題について理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・CO2 排出量を抑えることが喫緊の課題</li> <li>・再生可能エネルギーは発電量が気象条件に左右され、安定供給面に不安がある。停電のリスクがある。</li> <li>・調整電源としての火力発電の必要性</li> <li>・世界情勢によりエネルギー価格が高騰</li> <li>・原子力発電所は事故が起きると被害が大きい</li> </ul>	<p>15分</p>	<div style="text-align: center;">  </div> <p>○最新のデータや資料を提示し、エネルギー価格高騰など先の読めない世界情勢、万が一の事故が発生した場合の心身の健康被害や莫大な損害賠償などの影響について、問題提起する。</p> <p>○各発電方式のプラス面・マイナス面を理解できるよう討論形式で説明し、正解はなく、最善策を考えることを促す。</p> <p>○ライフサイクルアセスメント(教科書P.193)を説明することで、資源採取・製造・輸送・使用・廃棄など全ての段階を通して評価することを促す。</p>
<p>4. これまでの学習で調べた発電方式の長所・短所をもとに班ごとに発電電源構成を考える。</p> <p>●火力発電は、ベースロード電源として安定供給のために必要な電源だ。</p> <p>●水力発電は、発電所建設時に環境面への影響が大きい。</p> <p>●太陽光発電は使用時には環境負荷が少ないが、パネル製造時と廃棄時に環境面への影響もある。</p>	<p>25分</p>	<p>○学習者用端末を用い、班ごとに発表する。(各班1分の発表、全3班)</p>

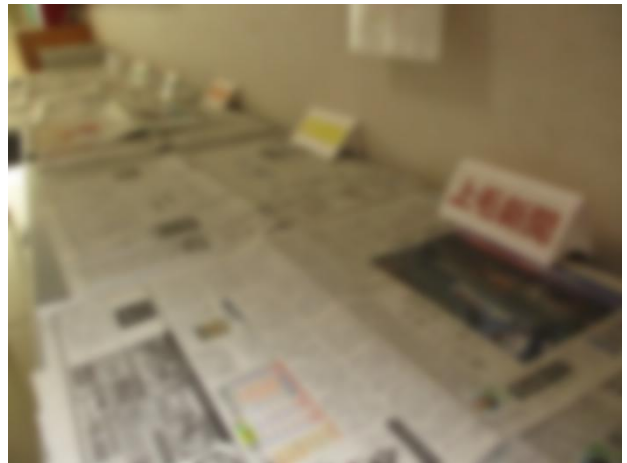
<p>5. 本時の学習課題を確認し、学習の振り返りとして自分なりにまとめる（個人）</p> <p>●選挙権を得たときに、エネルギー政策について、政党を選ぶ時に役立ちそうだ。</p>	<p>5分</p>	<p>○今後の生活において、エネルギー問題について自分の意見・意思を持てるよう今後も学んでいく必要があることを伝える。</p> <p>○感想を学習者用端末に記述させる。</p>
--	-----------	--

<p>【評価項目】（評価の観点）</p> <p>○安全面・安定供給面・環境面・経済面の観点から持続可能な発電電源構成を考えることができる。</p>
---

## ⑤成果と課題

### 〈成果〉

- ・エネルギーミックスについて ICT を利用し視覚的に示すことで説明する時間の短縮や充実を図ることができた。
- ・思考を可視化するツール（新聞記事の切り抜き、スライド等）を多用することで、生徒の思考を可視化することができた。
- ・外部講師（エネルギー関連企業、自然保護協会、新聞編集者科学担当）を活用しながら授業を行うことで、生徒が学習内容について深く学ぶことができた。



## （2）社会科での実践

### ①単元名 国の政治の仕組み

### ②教材の目標

国会の仕組み、法律や予算ができるまでの過程、衆議院の優越について、衆議院選挙やその後の内閣総理大臣の指名の様子についての新聞記事を活用することで、生徒達が国の政治の仕組みについて理解を深められるようにする。

### ③本時の学習

衆議院選挙告示についての記事を元に、3つのテーマについて各政党の掲げる政党公約を比較する。

### ④成果と課題

#### 〈成果〉

- ・情報を集めるために数社の新聞を読んだ。
- ・「今」起きている出来事について扱っているので生徒の意欲が高まった。

#### 〈課題〉

- ・新聞社によって切り取る角度が大きく異なるテーマもあり、情報を拾えないこともあった。
- ・表現が難しく、低位の生徒にとっては読み取りが困難なこともあった。

## （3）よむ YOMU ワークシートの実践

### ①実践方法

毎週火曜日によむ YOMU ワークシートを実践した。朝の活動を活用し、新聞の記事を読み問題を

解いたり、その記事についての理解を深めたりした。

## ②成果と課題

### 〈成果〉

- ・新聞すべてに目を通す必要がなく、活字に抵抗感がある生徒も短い時間で記事を読み学ぶことができた。
- ・新聞記事を読むことの導入として活用することができた

### 〈課題〉

- ・問題集の一部として取り組む生徒もおり、新聞記事を読む感覚が養われていない生徒もいた。

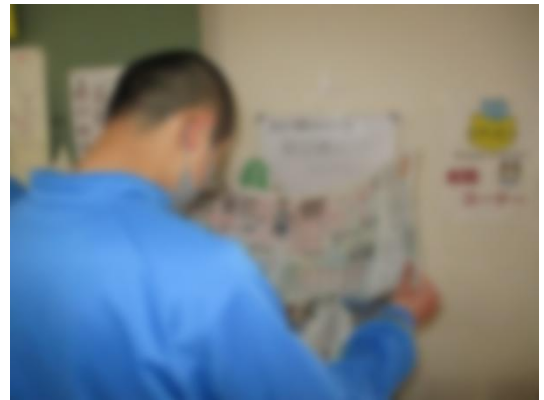
## 4. 感想と今後の課題

### 〈成果〉

- ・新聞記事についての「テレビのニュースでは〇〇と書いていたけど、新聞には〇〇と書いてある。先生はどう考えますか？」と自信の考えと周りの考えを比較しながら知見を深める生徒がいた
- ・自身の地域についての関心が深まった
- ・旅行のまとめを作成する授業では、新聞の記事の書き方や構成について自ら学ぶ生徒が増えた

### 〈課題〉

- ・活字離れが進む中、すべての生徒が自主的に新聞を活用するには至らなかった
- ・新聞を読む際に一社読み満足してしまう生徒も多くいた。読み比べのポイントを精査していきたい。



# 情報を受信し、考える素材としての新聞の活用

明照学園樹徳中学校 小須田 美枝子

## 1. 学校の概要と全体での取り組み

明照学園樹徳中学校は、中高一貫校として平成元年に開校した。各学年2クラスで1クラス20名の少人数教育により、「AI時代のリーダーにふさわしい知識を備え、智慧と慈悲との調和のとれた、物事に感謝できるすぐれた人材の育成をめざす」ことを教育理念として、独自の一貫校メソッドに基づき、教育活動を行っている。

本校はNIE実践校の認定1年目である。真の自己表現ができる生徒の育成を目指す本校において、新聞は情報を得ることや、社会に目を向け考え、自己の可能性を広げ、思考力を高めるツールとして、大変有効な素材であると考えた。生徒は、素直で真面目だが、新聞はあまり身近なものではなく、情報源としている生徒も少ないという実態がみられた。そこで、今年度は「情報を受信し、考える素材としての新聞の活用」をテーマに、国語科を中心に組み込んでいくこととした。

## 2. 新聞の置き場所

担当職員で新聞の取り方について話し合い、7紙を一斉でなく、月ごとに同じ新聞を複数(4部)取るもの6紙と、継続して複数月取るもの1紙(各月1部)とに分ける方法を選択した。そのため、以下のように置き場所を分けた。

- ・今年度NIEを実践する中心学年を1、2年生とした。学年2クラスのため、一度に4部をいただき教室保存とすることで、各クラスで生徒が手に取りやすい環境を作りたいと考えた。
- ・本校では、学校購読として2紙を併設の共生図書館に置いている。これらと重ならない1紙(日本経済新聞)は共生図書館と一緒に置くことで、他紙との比較や専門性を生かすことができやすいと考えた。

## 3. 実践事例

### (1) 新聞への投稿

俳句、短歌、作文など、生徒の作品を定期的に投稿し、作品が掲載された新聞は、一階の廊下に掲示している。部活動などでの活躍と同様に生徒の作品が並ぶので、投稿への意欲につながっている。【写真1】

投稿を続けてきた3学期末の生徒へのアンケートでは、「とても好き」(36%)「やや好き」(44%)を合わせると、80%が「投稿は好き」と答えている。



- ・授業で初めて俳句や短歌を書いた。季節ごとに書くことで、日常的に身近にある季節のものに気づき、それに対して自分がどういう気持ちで過ごしていたか改めて感じる事ができた。
- ・作文をたくさん書いたことで自分の気持ちや考えを整理するのが得意になった。

## (2) 新聞記者による講話

1学期の終わりに、2年生を対象に、上毛新聞桐生支局の記者にお越しいただき、新聞の特徴や取材・記事の特徴などについてお話しいただいた。2学期から新聞購読が始まることと、「一緒に読もう新聞コンクール」を夏休みの課題としたことなどから、新聞への関心を高めることを目的にこの時期に設定した。【写真2】

生徒は、記者の話に真剣に耳を傾けていた。特に、取材の苦労や記事になるまでの経緯や工夫などが印象深かったようで、新聞について改めて見直す良い機会となった。

講話の後、生徒にとってアンケート（実態）と感想は以下の通りである。

### 1. 新聞をどのくらいの頻度で読みますか？

ほぼ毎日読む	10.0%
時々読む	23.3%
あまり読まない	26.7%
ほぼ読まない	40.0%

### 2. 今日の講話を聴いて、新聞は社会において役に立つマスメディアだと思いますか？

とても役に立つと思う	60.0%
わりと役に立つと思う	36.7%
あまり役に立たないと思う	3.3%
全く役に立たないと思う	0%



【写真2】 <上毛新聞社提供>

#### ○ どんな点が役に立つと思うか

- ・新聞はインターネットのニュースよりも正確性があると思う。
- ・スマホなどで調べると、検索したことしか出てこないが、新聞だと色々な分野の情報を入手でき、ひと目でいろいろな内容がわかる。
- ・客観的な視点で時事を知ることが出来る。

#### ○ 今日の授業の感想

- ・新聞の作られ方を知ったのは初めてだったのでとても興味深かった。また、自分がいつも読んでいる新聞が届くまでの経緯を知れてよかったと思う。
- ・地方新聞がその地域の特色を表していることを知った。
- ・ただ記事を書くのではなく、実際の写真を使って事の重大さと恐ろしさ、危機感を感じさせるような新聞を作り上げていくために、沢山メモをして事故や事件について深く知ってまとめていることを知り、工夫されているものなのだなと感じた。
- ・新聞の見出しの大きさに意味があることを知り、大きい順に優先度が高くなっていることに驚いた。これから新聞を読むときは、見出しが大きいものを中心に読むようにしたら時間の短縮もできるし、便利だなと思った。また、見出しの文字数が決まっているということに驚いた。

## (3) コラムの写し書き

新聞への関心を高め、集中力・語彙力・表現力の向上を目的に、編集手帳の書き写しを国語の自主学

習に取り入れた。約 450 字を書き写し、語句調べと感想を書くことを課題とした。「大変」という声もあったが、質の高い文章を書き写すことで、文章構成力が養われ、内容や知識の定着にも繋がる。また、社会問題について他者の考えに触れる機会にもなる。この取り組みを通し、生徒が自分の想いをさらに表現できるようになったと感じており、来年度も継続したいと考える。

(4) タイトル (見出し) クイズ

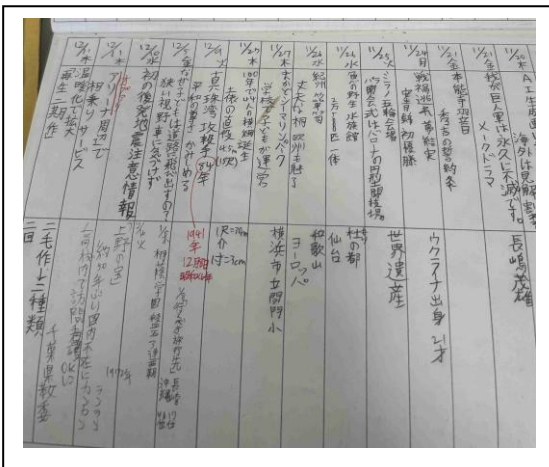
新聞を購読できるようになった9月から、1, 2年生ともに、国語授業の初めに、以下の要領で「タイトルクイズ」を取り入れている。

- ① その日の新聞記事の中から見出しを選び、一部を空欄にして提示する。
- ② 日直が次時の初めに、正解を記入した用紙を黒板に張っておく。【写真3】
- ③ 教師がポイントを簡単に補足する。生徒はノートに記録し、余裕があればコメントを書く。【写真4】

4】



【写真3】



【写真4】

【写真3】の例では、「老朽□□□□対策道半ば／埼玉□□一年」を提示した。生徒からは、埼玉一年から「あ、あの事故だ。」「道路の陥没。」とすぐ出てきたが、「インフラ」は思い浮かばず、翌日、日直が発表すると、「なるほど。」と声が上がった。教師からは、インフラの用語説明と陥没の漢字の確認をした。

短時間ではあるが、毎時間継続することにより、生徒の関心の高まりを実感した。

年度末のアンケートでは「学ぶことが多かった」(59%)、「時々学ぶことがあった」(40%)と、ほぼ全員が肯定的に感じており、多くの気づきもあった。また、振り返りには、上記のような発見だけでなく、自分自身の変化や向上についての記述も見られた。

- ・クイズの答えを見つける中で、情報を知ることと同時に読むスピードが付き、言葉や熟語の意味を知ることができることに気づいた。
- ・伝えたいことが比喩のように表現されていると興味をもって読むことが多い。新聞学習は、世間を知るだけでなく、表現方法を知ったり、見つけて気づいたりすることで理解を上げる学習だと感じる。

## (5) 新聞を活用した授業

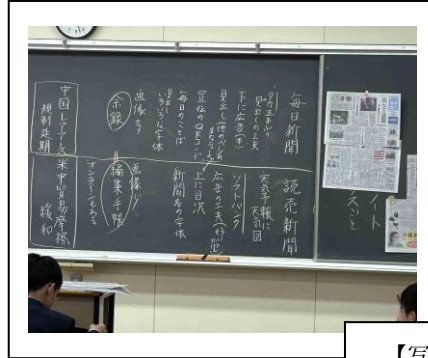
### ① 同じ日の2つの新聞を比べ、共通点や相違点を話し合う。(1年)

活動：班でそれぞれの新聞の特徴を話し合う。【写真5】 →全体で共有する。

成果：発見したことを発表し合い、共通している特徴やそれぞれの新聞の個性が共有され新聞への理解が高まった。【写真6】また、分かったことをまとめ、新聞に投稿した。



【写真5】



【写真6】

### ② 同じテーマについての複数の新聞投書文を読み比べて自分の考えをもつ (2年)

活動：『『障害』に違和感、こう呼んでは?』というタイトルで「視覚障害者」というより「要支援者」と呼んでは?』という投稿文に対し、「投稿者の意見に賛成」、「ヘルプマークと連動させ、共生社会の礎に」、「障害は人格とは無縁、違和感ない」、「障害者も他人を支援している」など、様々考えの投書が並び、生徒はそれをもとに考えを深めていった。

成果：・投書文は一般の方の文章のため、難解ではなく共感しやすい。それぞれの立場により考え方が様々なことを知ることは多様な社会を知る一端にもなり意義あるものと感じた。

・活動のゴールは各自が自分なりの意見を持ち投書文を書くこととした。生徒はそれぞれの投書を、考えの手がかりや根拠を見つけるきっかけとし、自分の投書文につなげた。それらの作品は実際に投稿し、数人の投書文が掲載された。

## 4. 1年間の実践を終えて

### (1) 生徒の変容

2学期末のアンケートでは、「以前と比べて新聞に対する興味関心を持てるようになったか」という問いに対して、「とても」(23%)、「やや」(59%)を合わせると、82%が「興味をもてた」と答えた。さらに年度末では、「とても」(42%)、「やや」(53%)を合わせると、95%と上がった。

- ・新聞を見る機会が増え、日本の現状について考える機会がかなり増えたと思う。
- ・クイズで出たことをネットで見たり、他に載っているか調べたりするようになった。

### (2) 実践者の感想

・タイトルクイズを継続する中で、生徒たちの社会への関心が高まっていくのを実感した。導入の短時間ではあるが、その見出しから、何を考えさせるのか、何を伝えるのか、実践者自身が的を絞り、明

確に意識して日々提示することが大切であることも感じている。

- ・これまで新聞記事＝事件と捉えがちであったが、「小学校で水族館運営」や「温暖化で拡大 再生二期作」など、わくわくするような記事や新たな知識や情報などその内容は多岐に渡り、読んで心が温かくなることも度々あった。また、限られた見出しの文字数の中に言い得て妙な表現が見受けられ、これを目で追うことで大まかな情報が分かり、その中で惹かれた記事を読むという読み方もありと実感し生徒に紹介した。

### (3) 今後の課題

- ・今年度は、『受信』を主に取り組んできたが、生徒から「新聞を作成してみたい」、「新聞記事を各自が持参し、その記事の魅力やポイントをまとめて発表しあう」など、前向きな声がいろいろあがった。その意欲を大事に、次年度は『受信から発信』をテーマに、思考力、自己表現力の向上につなげられるよう、さらに取り組んでいきたい。
- ・新聞の置き場所について、今年度は各クラスとしたが、生徒に意見を求めたところ「複数紙を読み比べられるから、一階の職員室前」という声があった。本校は、全生徒が職員室前を通るので、新聞のとり方と合わせ、より活用できる方法を検討したい。

# 新聞記事スクラップによる「社会への主体的関与」の育成

～1年間のNIE実践と新聞投稿を通じた「自分事化」

群馬県立大泉高等学校 国語科教諭 田村久美子

## 実践事例

### ①どの教科・科目、領域等で実践したか

対象生徒：高校3年生(52名)

教科科目：「国語表現」(生物生産科・グリーンサイエンス科3年選択授業 生徒数15名)

「国語セミナー」(普通科3年 生徒数37名)・・・ともに2単位

### ②研究のテーマ

「新聞記事スクラップと私」

### ③授業などでの実践事例

週に一回の授業(2単位：連続2時間授業)に向けた課題・準備として、生徒それぞれに「新聞記事のスクラップ」を取り組ませた。毎時間の授業の始まりの15分にはこの課題を使い、席の近い4名(または3名)でグループを作り、その仲間同士で共有をさせた。夏の長期休み中にも週に一度の回数を継続して取り組ませ、この新聞スクラップ課題は一年をかけて続けた。(一年をかけ、長期休み課題も含めると40回分ほどの回数となった。)新聞を自宅で取っていない生徒も多く、新聞記事を探す際には、インターネットを使うことも認めたが、もしインターネットを使う際には、「新聞社の公式サイト」を情報源とすることを条件とした。また、新聞記事の切り抜きやプリントアウトする環境が整っていない家庭の生徒には、出典を明記した上で、その記事の第一段落を書き写す様に指示した。

4月の授業オリエンテーションの際に、「新聞スクラップ」の課題の手順として、「①出典と日付②興味を持った理由③記事に対する意見④記事の中に出てきた語句調べ」を書き込むよう指導した。ノートは、ルーズリーフは禁止とし、一般的な大学ノートを準備するよう指示した。「新聞スクラップ」課題に生徒が興味を持つ為に工夫した点としては、NIEの一環として、「新聞の読み方・情報の得方」をテーマに新聞社の方に来校頂き、出前授業を行ったこと、他には、過年度の先輩の取り組んだノートの写真を見せるなどした。また、一年の締めくくりとして、「実際に新聞社に投稿文を送る」ことがこの授業の最終学習内容であることを伝えた。このことも、一年を通して課題に意欲的に取り組んでもらうための動機付けとして考えたことである。

12月に実施した「実際に新聞社に投稿文を送る」という発展的な單元では、先ず各新聞社(上毛新聞・読売新聞・朝日新聞・毎日新聞の4紙)の読者投稿欄を生徒に紹介し、クラス内を4紙毎の担当を分けてそれぞれの該当箇所を読ませ、そもそもどのような内容が新聞に載っているのか(この際、生徒から一般の方の意見(声)が新聞に載っているスペースがあること自体が新鮮であり発見であったという感想を多く受けた)、どのような書き方が読者(他者)に「読みたい」と思わせられるのかを考えさせ、グループ毎に話し合わせた。次に、生徒自身が世間に向けて伝えたい社会問題やそれに対する意見、身近な人



への伝えたい思いなどについて深めさせた。今回は、生徒それぞれが実名を明かし、責任を持って自分の意見を社会に届けるということを伝えた上で、生徒一人につき必ず一つ投稿文を完成させ、実際に新聞社ホームページの投稿ページから投稿することを授業内の目標とした。実際、52名全ての生徒が投稿までやりきることができた。

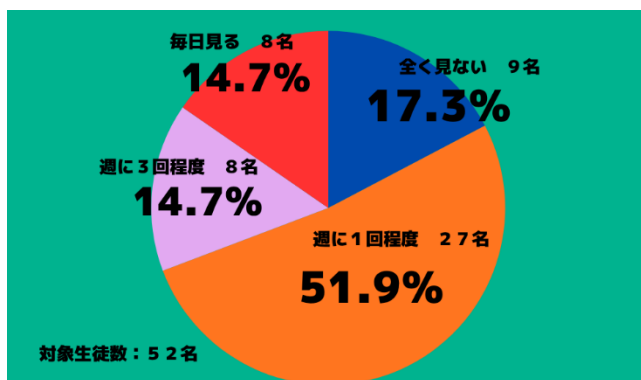
実践前後の変化

### ① 【事前アンケート】

実践前(授業オリエンテーション)の、4月16日・17日の授業で「自身の「新聞」や「ニュース」を見る頻度について、次の内どれが最も近いですか?」という質問内容で該当生徒52名にアンケートを取った。(結果 右円グラフ⇒)

4月のアンケートの「毎日見る (14.7%)」と「週に3回程度 (14.7%)」を合わせた約3割 (29.4%)

という結果から、対象生徒のおよそ3人に1人は、日常的にニュースに触れる習慣を持っている状態であることが分かる。その一方、「全く見ない (17.3%)」が、「毎日見る (14.7%)」を上回っていることも分かる。このことは、ニュース媒体(新聞、テレビ、アプリ等)から意識的に距離を置いている、あるいは「自分には関係ない」と感じている層が生徒の中の一定数存在することを示唆している。これらのことから、生徒の中で、情報の二極化(熱心に見る層と全く見ない層)が進んでいる可能性があることが見えてくる。4月実施で見えてきた「積極的な情報収集派(約3割)」、「消極的・限定的な情報収集派(約5割)」、「非視聴派(約2割)」というこのアンケート結果の傾向から、「媒体は問わない」という条件であっても、対象生徒において「毎日ニュースを見る」ことが必ずしも当たり前ではない実態が浮き彫りになった。

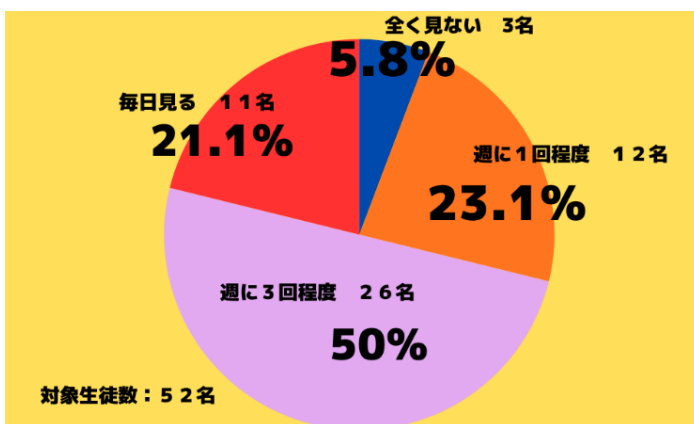


### ② 【事後アンケート】

授業終了となる2月4日・5日の授業最終日に「自身の「新聞」や「ニュース」を見る頻度について、次の内どれが最も近いですか?」という、4月と同じ質問内容で該当生徒52名にアンケートを取った。(結果 右円グラフ⇒)

前述の①で行った4月のアンケート結果と比較すると、「週3回程度」が14.7%から50.0%へと全体の半数を占めるようになり、全体的にニュースに触れる頻度が大きく向上した。

その他にも読み取れる変化として三点言及したい。先ず一点目として「習慣化の進行」である。「週3回程度」と「毎日見る」を合わせると7割以上(71.1%)に達しており、生徒の日常的にニュースを見る習慣が定着している層が多数となった。二点目として、「全く見ない」層の減少である。前回のデータ17.3%に比べ、今回はわずか5.8%までに減少している。三点目として、「積極的な情報収集への変化」



である。2月のアンケートでは、最多層が「週1回」から「週3回」へとシフトしており、該当生徒達がより頻繁に社会の動きをチェックするようになってきている傾向が見て取れる。

実践の感想(生徒) 生徒が「新聞スクラップ」(N I E)に1年間取り組み、どんな感想を持ったかについて、実際の感想を紹介したい(原文ママ)。

【生徒 A】	高校に入ってからニュースを見る機会が減っていったのですが、授業を通して知っているニュースを友達と話題にするようになりました。
【生徒 B】	新聞スクラップをやる前はニュースとか見ても「へー」くらいだったけど始めてからニュースを見ると自分事として考えられるようになった。
【生徒 C】	自分では調べないようなニュースも積極的にふれるようになり、世の中で何が起きているか分かるようになった。テレビのニュースを見て、「このニュースに関連する記事を調べたな」と思うことが増えた。
【生徒 D】	自分が興味あることだけではなく、興味ないことでも社会の様々なことを知るきっかけとなりました。また、ニュースを読むだけではなく、興味を持った理由、意見、感想は自分の思いを整理できるようになったことが成長だと感じています。
【生徒 E】	ニュースや新聞などは身近にあったけど聞き流す程度だったのが、新聞のスクラップを始めてからはそのニュースについて自分の感想や意見を考えるようになりました。また、関心を持ったニュースについて深く調べていくことで、新たな知識を得ることができました。

#### 実践前後の変化・生徒の感想から見えてくること

上記で紹介した生徒を含む多くの生徒の感想から、以前はニュースを「聞き流す程度」「他人事」と捉えていたが、スクラップを継続することで、「自分事として考える(生徒 B)」「自分の感想や意見を考える(生徒 E)」という能動的な姿勢に変わってきている様子が見て取れた。これは、毎週継続的に「自分の意見を書く」というアウトプットの訓練により、ニュースを見る際の生徒自身のモードが「受け身」から「思考型」へ変化したものと考えられる。まさに、情報との関わりが「受動」から「主体的関与」へと変化していることが見えてくる。また、生徒 C の「テレビを見て、関連する記事を調べたなと思うことが増えた」という記述からは、授業でのスクラップ(新聞)と日常生活でのニュース(テレビや SNS)内容が頭の中でリンクし始めていることがわかる。生徒達にとって情報が断片的な「点」ではなく、知識のネットワーク(線)へと変化した根拠ともなる記述である。生徒 C・D の「自分では調べないようなニュース」「興味のないこと」にも触れるようになったという点は、アルゴリズムで好みの情報だけが流れてくる SNS 時代において、新聞という媒体が持つ「偶然の出会い」の教育的効果を象徴しているといえる。「学校の授業の一環」いう、生徒にとっては取り組まざるを得ない「課題」により、視野が強制的に広げられることで、社会の解像度が上がり、「世の中で何が起きているか分かる(生徒 C)」という生徒自身でも実感できる自身の成長と自信につながったものと考えられる。

#### 実践者の感想

実践による嬉しい成果としては、生徒の感想の「友達と話題にするようになった」(生徒 A)や、「思いを

整理できるようになったことが成長だと感じている」(生徒D)という記述である。ニュースを共通言語として生徒間でも対話生まれ、社会性が育まれていることは、予想を超える成果であったと感じている。また、生徒の感想から見えてきた、3年生の卒業前の年度末(2月)という時期に、生徒が自分自身のスキルの向上をメタ認知(客観的に把握)できている点は、1年間の地道な継続が生んだ成果であると考えられる。他にも、夏休み明けの就職試験や大学入試に関わる面接や小論文対策としても「新聞スクラップ課題」が生かされて助かったという多くの報告があった。自身の興味ある分野や1つの出来事や問題に関わる記事を数か月にわたり課題と絡めて追う生徒もいたこともあり、「新聞記事スクラップ課題」が、実利面でも生徒個人の自信を向上させることにつながったものと考えられる。地道な課題の取り組みで得た知識とアウトプット訓練で培った思考力が生徒それぞれの進路実現の一助となった点は、授業担当者としても嬉しいことであった。

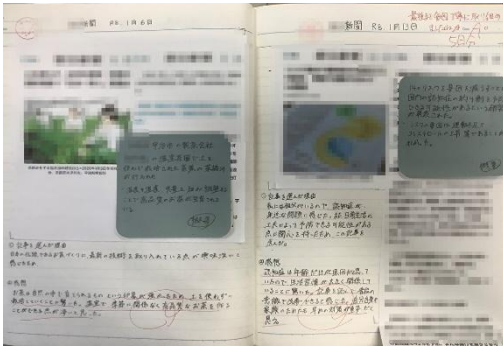
12月に実施した「実際に新聞社に投稿文を送る」という発展的な単元成果としては、52名中20名(上毛新聞社:14名、読売新聞社:4名、朝日新聞社:1名、毎日新聞社:1名)が実際に採用された。その内、2つの記事については、生徒の投稿に対して一般の方からの反響投稿があり、それも含め、授業内で全体の生徒とともに共有した。具体的には、上毛新聞12月23日に掲載頂いた生徒(看護師の母親の影響を受け、自身も看護師を目指すという内容)の記事に対する、反響投稿記事(看護の現場で過去に働いていた先輩看護師からの応援)が1月4日付けに掲載された。このことは該当生徒のいるクラスでも共有し、掲載された生徒とともにクラスメイト皆が自分のことのように喜んでいて、個人の言葉を介した社会への関わりは、目の前にいる方はもちろんだが、目の前にいない人へも影響を与えることがあることに、今回の取り組みで改めて気づかされた。この投稿文の単元では、新聞投稿で緩やかにつながる言葉の温かさを実感するとともに、生徒とともに「言葉の持つ影響力」を学ぶ貴重な体験の機会となった。

#### 今後の課題

今回の実践では、1年間の継続的なスクラップ活動と最終的な新聞投稿を通じ、生徒の社会への関心や思考力に変容が見られた。これらの成果を維持・発展させるため、以下の二点を今後の課題として挙げたい。一点目として、今回、「新聞スクラップ課題」を新聞社の公式サイトを条件としたことで、一定の信頼性は確保されたものと考えられる。しかし、生徒が日常的に触れるSNS等の断片的な情報と、新聞記事のような構造化された情報の「質の差」について、より理論的に理解させる必要があると言える。生徒が単にニュースを見る頻度を上げるだけでなく、情報の背景(誰が、何の目的で発信しているか)を批判的に読み解く「メディアリテラシー」のさらなる強化に向け、授業を改善したい。具体的には、出前授業のより一層の活用や講師と連携した学習内容の改善に取り組みたい。

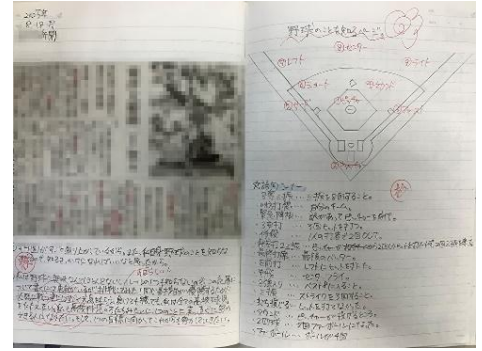
二点目として、今年度授業内で取り組んだ「新聞スクラップ課題」は、高校3年生という時期的な動機付け(進路対策)が功を奏した面もあるが、1年間で40回の継続は、生徒にとっての負荷も小さくはなかったといえる。1・2年次からの段階的導入や、他科目他教科の授業内容とリンクしたテーマ設定を行うなど、学校全体で「社会を見る目」を養うカリキュラム・マネジメントの検討を進めたい。

実際の生徒の取り組みノート紹介



←(左)気になる記事の要約を自身で行い、付箋に張っている。

(右)→高校野球に関する記事を元に、自分で「野球を知るページ」を設け、守備の説明などを書いている。



「新聞を読む」ことを通じて、社会と自分とのかかわりに

関心を向ける力を育む

群馬県立玉村高等学校

## 1. はじめに

本校は群馬県県南部、「鶴舞うかたちの群馬県」の右羽の付け根に位置する1学年2学級の普通科高校で、令和7年度に創立103年を迎えた伝統校です。平成21年度に「ぐんま チャレンジハイスクール」の指定を受け、平成24年度からは、学校設定教科（教養表現）・特別活動・総合的な探究の時間を組み合わせた、教科横断型の教育課程である「玉高チャレンジプラン」がスタートしました。この教育活動を基盤として、生徒たちは、変化の激しい社会で主体的に生きていくために必要な学習の基礎・基本を身につけ、社会で求められるコミュニケーション能力を習得することを目標に、学校生活を過ごしています。

## 2. 本校におけるNIE活動

### (1) 計画立案の経緯

令和6年度は「新聞に触れる」ことを第一の目標として取り組んできました。昨年度から引き続きNIE活動を推進していくにあたり、今年度は「社会の出来事への関心」「自分との関わり」について意識することを目標に定めました。昨年度からの取り組みにより、新聞を読むことへの抵抗感は幾分か和らいだよう感じます。ですが、依然として実社会の出来事への関心の限定や社会で起こる出来事と自分の関わりについてあまり意識ができていない生徒も多く、目に入りやすい出来事のみで終始してしまっているように思われます。卒業と同時に社会へ旅立つ生徒も多い本校では、身近な社会の出来事だけにとどまらず、世の中で起こっている様々な出来事に関心を持ち、その出来事について自分の考えを持ってほしいと考えています。

そこで、今年度では昨年から取り組んでいる①「朝の読書」の時間を活用し、生徒全員が新聞に触れる機会を設けること、②運営は各クラスの図書委員が行うこと、③活動の節目となる行事を計画的に配置すること、に付け加え、④授業内での新聞の活用、生徒自身の考えの提示を活動の柱にすることにしました。

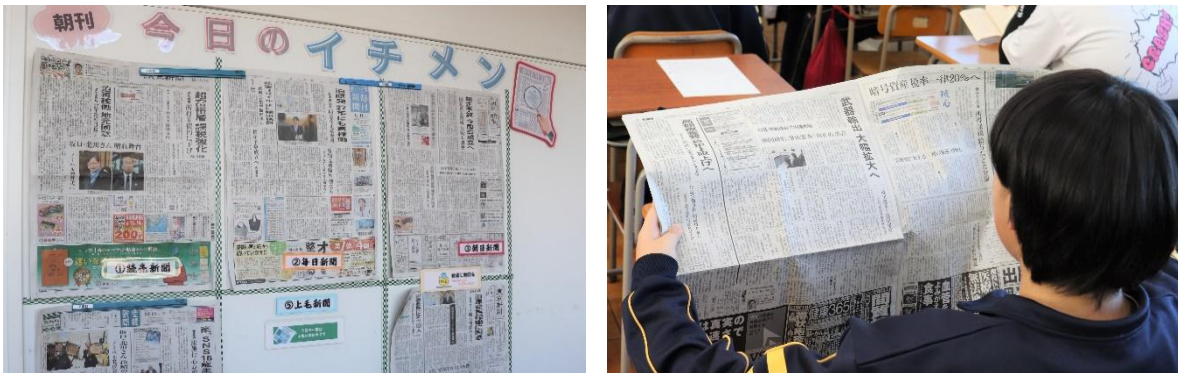
### (2) 実際の取り組み

#### ①「朝の読書」での取り組み

本校では朝のSHRが始まるまでの10分間を「朝の読書」に充てています。本校では指定校決定後の9月～12月の4ヶ月について、次の活動を行いました。

- 《1》 登校時に職員室近くに設置した新聞置き場から週替わりで、図書委員が教室に運ぶ
- 《2》 図書委員は日直に新聞を渡し、日直は「朝の読書」の前半8分間を使い、気になる記事とその理由を説明できるようにする。
- 《3》 日直は残り2分で気になる記事を発表し、学級担任はその記事について共有できるようコメントする。
- 《4》 日直は発表した記事をマーカーペンで囲み、図書委員に手渡す。
- 《5》 図書委員は回収した新聞を図書室に届け、学校司書はその新聞を指定した場所（生徒玄関）に掲示する。

新聞は、群馬県ではNIE用に7紙配達されるので、6紙を各クラスで利用できるようにし、1紙は隔日発行の経済紙のため、進路閲覧室で進路指導用の資料としました。また、週単位でクラスに手配する新聞を交代させることで、各新聞社の論調の違い等に気付かせるよう、昨年度から引き続き工夫を施しました。



## ②新聞ワークシートの活用

①「朝の読書」での取り組みと並行して、2週間に1回を目安に、各誌が発行している新聞ワークシートの活用を行いました。

《1》 登校時、職員室近くに設置した新聞記事置き場から、第二・第四週の金曜日に図書委員が教室へワークシートを運ぶ

《2》 図書委員はクラス全員へワークシートを配布し、「朝の読書」時間を使って新聞記事を読み、ワークシートの質問に答える。

《3》 クラス担任が「朝の読書」時間終了と同時に回収し、生徒の内容を確認する。特に良く読み取っているもの、意見がよく書けているものを各クラス2名選抜する。

《4》 各クラス選抜2名のワークシートを、学校司書は指定した場所（生徒玄関）に匿名で掲示する。

外国籍の生徒には英字新聞のワークシートを配布するなど、工夫を行い、全員がワークシートに取り組めるようにしました。毎回異なるテーマの新聞記事ワークシートに触れることで、生徒自身が普段読まない内容の新聞記事に触れる機会となり



ました。また、新聞内容の読み取りや自身の考えを記入することで、生徒の新聞記事内容をどの程度理解しているか把握することができました。

### ③授業での新聞の活用

12月上旬、読売新聞社が主催する「読者が選ぶ10大ニュース」への投票を、「公民科」の授業を中心に行いました。1学年では「公共」、3学年では「政治・経済」、2学年では「公民科」の授業の履修がないため、学校設定科目である「教養表現」の授業内で活動を行いました。「公民」では社会・経済の仕組みや現代の諸問題を自分との関わりを考えながら学んでいます。「公民」の授業では、普段からも学習内容と現実で起こっている出来事・ニュースを度々取り上げながら学習をしているため、1年の振り返り学習と新聞を絡め、新聞を活用した取り組みを行いたいと考えました。取り組み内容は以下の通りです。

《1》国内、海外それぞれの「読者が選ぶ10大ニュース」の候補リスト記載のワークシートを配布する。

《2》公民科教諭、学校司書から投票方法について、そして一年を振り返りながら主な新聞記事について実際の新聞記事を提示しながら簡単な説明を行う。

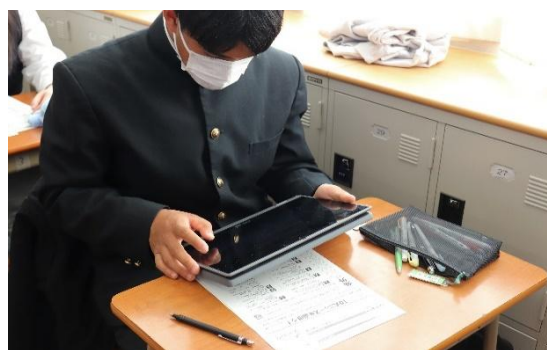
《3》ワークシートに記載されたリストのなかから気になる記事やあまり内容を詳しく知らない記事を実際の新聞記事を読み、ニュースの内容を理解し、今年の10大記事は何かを考える。

《4》国内、海外それぞれのニュースから10大ニュースを選び、投票する。

《5》投票結果発表後、選ばれた10大ニュースの振り返りと正答率の高かった生徒の表彰を行う。

国内ニュースでは、自分にとって身近なニュースだけでなく、さまざまな年代がどのようなニュース記事に注目しているのだろうかという予想を立てながら考えることができるため、自分では知ることのなかった世の中の動き・出来事について触れる機会になりました。また、互いに投票候補リストにあるニュースについて生徒同士で説明し合う場面も見られ、新聞記事から社会の出来事に興味を持つきっかけづくりになったと感じます。

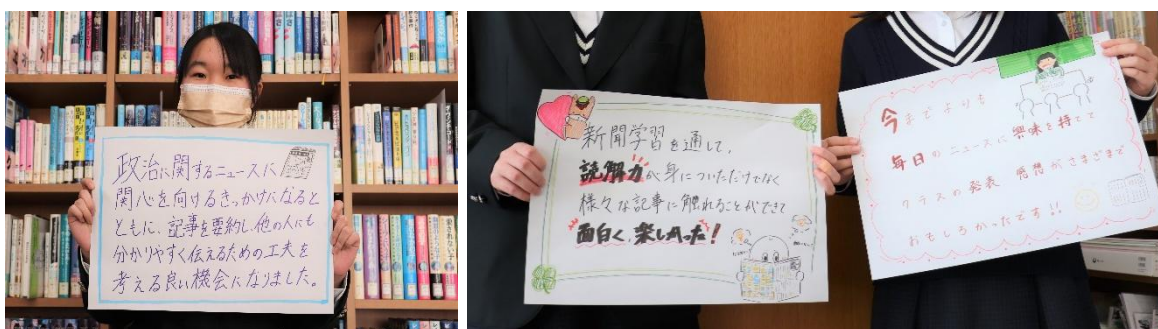
このほかにも2学年の「国語表現」の時間では、新聞の仕組みを説明するとともに、限られた文字数で出来事を伝える工夫について学びました。最終的には、新聞の一面を主に用いて、「リード文」読み、「見出し」を考えてみようという取り組みを行いました。生徒自身が選んだ記事のリード文を読み、実際に付けられた「見出し」と生徒自身が考えた「見出し」3つを選択肢にいれ、どの選択肢が実際に付けられた「見出し」であるのかを当てるという形式で行いました。最初は少ない文字数に苦戦しながらも、どの言葉を選べば的確な内容を表すことができるのか推敲を重ね、的確に内容を表現することができた生徒もいました。



### ①生徒の変化

・10大ニュースの取り組みでは、自分の関心以外にも世界でどのような出来事が起こっているか、新聞を通して知る機会となりました。また、互いに新聞記事についての会話も多く交わされており、記事の内容理解があまりできていない生徒に新聞に書かれている内容を自分の言葉で説明し直し、考えを付け加えながら話す場面も多数見られました。

・図書委員のNIE取り組みへの振り返りでは、「クラスメイトがどのような記事を選ぶのかわからないので、さまざまな出来事を知ることができるのが興味深かった」という声や、新聞記事について「話す」「伝える」ことに自信がつき、「自分の考えをどのように表現すれば難しい内容の記事を理解してもらえるのか工夫をする良い機会になった」というように、世間の出来事や表現方法の工夫への関心が高まっているのを感じました。



### ②今後の課題について

実践指定校2年目として、「新聞に親しむ」ことを継続しつつ、「新聞の活用」を課題に取り組みました。授業と新聞を関連させ、公民科での「10大ニュース」、国語科での「見出し作り」の実習は、視野を広げ、情報の取捨選択や要約の基礎を学ぶ有意義な機会になりました。今後は、新聞を単なる情報源として取り扱うだけでなく、思考を深めるための対話ツールとして活用し、他教科とのさらなる連携を図りながら、生徒の発信力を高める工夫を継続していきたいと思います。

本校NIE活動まとめ動画

[https://tamamurahs.gsn.ed.jp/videos/videos/view/127/4faf1aaa62fbb5c3aa471d84be351112?frame\\_id=309](https://tamamurahs.gsn.ed.jp/videos/videos/view/127/4faf1aaa62fbb5c3aa471d84be351112?frame_id=309)

# 総合的な探究の時間を踏まえた発展的な学習としての NIE 活動

高崎健康福祉大学高崎高等学校 神谷 直人

## 1. はじめに

本校は、1968年に群馬女子短期大学附属高等学校として開校し、2001年より校名を高崎健康福祉大学高崎高等学校と改称し男女共学となった全日制の普通科高校である。それぞれの目標に合わせた4つのコースを設置し(アスリートコース・進学コース・大進コース・特進コース)、スクールポリシーに「自他ともに Well-being の実現に向かう学習者」を掲げ、その実現に向けた「9つの非認知能力」の育成に注力している(図1)。中でも「総合的な探究の時間」は教育の柱であり、各コースの特性に応じたプログラムを展開している。

高等学校学習指導要領(平成30年告示)にて、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が『育成を目指す資質・能力の三つの柱』として位置付けられ、総合的な探究の時間の重要性が高まり、単に課題を解決することで自己の生き方を考える学びから、自己の在り方や生き方と不可分な課題を自ら発見・解決していく学びへと目標が刷新された。



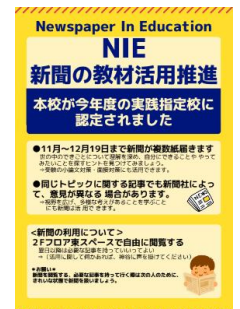
【図1 Well-beingの実現に向けたコンピテンシー】

本校における「総合的な探究の時間」の単位数(3年間合計)は、アスリート・進学コースでは3単位、大進・特進コースでは6単位に設定している。3年間のプログラムは、本校教員が独自に開発した内容であり、各コースのテーマに沿って実施している。これらの取り組みを客観的に評価するため、本校では Institution for a Global Society 株式会社(IGS)の「Ai GROW」を導入し、資質・能力(コンピテンシー)の成長を測定・可視化している。

今年度、本校での NIE の活動は2年目を迎えた。昨年度は、地歴公民科の「政治・経済」の授業において、各新聞社の社説を比較・分析する NIE 活動を取り入れた。今年度は、これまでの「総合的な探究の時間」で培った資質・能力をさらに発展・応用させる実践の場として、課外活動の枠組みで希望者を募り、新聞をテーマとした探究学習を実施した。

## 2. 学校内での取り組み(新聞コーナーの設置)

本校では年間を通じてクラス単位で新聞を購読しており、NIE 活動の一環として配布される新聞についても、昨年度に引き続き3年生フロアの専用コーナーに配架し、自由に閲覧できる環境を整えた。また、生徒の関心を高めるために案内チラシを作成し、各クラス



へ購読と活用を積極的に呼びかけた。その結果、休み時間や昼休みを利用して、熱心に紙面に目を通す生徒の姿が随所で見られた。

#### 《実践事例》

「総合的な探究の時間」を通じて培った資質・能力をさらに深化・発展させるべく、課外活動として「新聞を通して学びたい」「新聞を活用して探究したい」と考える意欲的な生徒を広く募った。その結果、個人参加に加え、部活動単位での参加を含めた計23名が集まった。また、今回の実践は上毛新聞社の多大なるご協力により実現したものである。本プログラムにおける主な活動(①～⑤)について説明する。

No.	活動内容	実施日・実施期間	
1	新聞記者(上毛新聞社:須藤様)による出前授業	2025年12月19日	①
2	新聞社訪問(企業訪問:上毛新聞社)	2026年1月9日	②
3	群馬県NIE推進協会 実践指定校交流会動画作成	2026年1月上旬～中旬	③
4	群馬県NIE推進協会 実践指定校交流会動画視聴	2026年2月2日	
5	探究活動「新聞のみらいを考える」活動期間	2026年2月上旬～下旬	④
6	探究活動「新聞のみらいを考える」中間発表会	2026年3月4日	
7	探究活動「新聞のみらいを考える」活動期間	2026年3月上旬～中旬	
8	探究活動「新聞のみらいを考える」最終発表会	2026年3月19日	⑤

#### ① 新聞記者(上毛新聞社:須藤氏)による出前授業

12月19日に行われた出前授業では、須藤氏を講師に迎え、記者としての視点や情報を伝える技術について学んだ。講話では、新聞記者の仕事の本質は「取材対象者と一対一で向き合い、信頼関係を築くこと」にあるという、対人スキルの重要性が説かれた。生徒たちはペアワークによるインタビュー体験を通じ、相手のストーリーを引き出すことの難しさと喜びを実感した。また、情報の要約技術についても指導を受け、最も重要な情報を冒頭に配置する「リード」の書き方や、伝えたい主題を明確にする写真撮影のコツなど、実用的なスキルを習得した。最後に講師より、「発行部数が減少する現状で、どうすれば新聞が読まれるようになるか」という、本探究の核心となる課題が提示された。

#### ② 新聞社訪問(企業訪問:上毛新聞社)

本社見学では、実際の新聞製作の舞台裏を肌で感じる貴重な機会を得た。文化生活部の土屋氏からは新聞製作の全体像を、写真映像部の新井氏からは、本校野球部の優勝記事を例にプロの撮影技術について話を伺った。「選手の動きを予想してシャッターを切る」というプロの言葉や、「見たものに一番近い形で提供する」というジャーナリズム精神に裏打ちされたこだわりは、生徒たちの心に深く刻まれたようであった。また、編集部では羽鳥氏の案内のもと、ニュースの価値を判断し、紙面上の適切な位置に配置していく「レイアウト」の工程



を学んだ。分単位の締め切り時間に追われる現場の緊張感に触れながら、記者が執筆した原稿が整理記者によって形を成していく一連の流れを体験した。これらの活動を通じ、生徒たちは新聞が単なる情報の媒体ではなく、多くの専門家の熱量と誇りによって作られていることを深く理解することができた。

### ③ 群馬県 NIE 実践指定校交流会動画作成

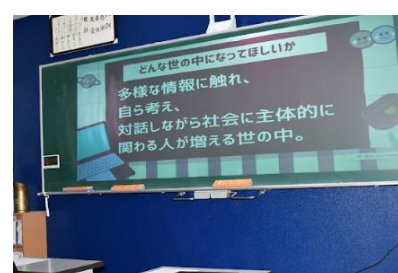
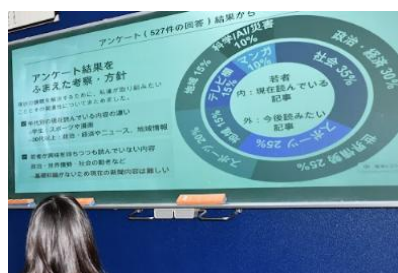
これらの貴重な体験を共有するため、新聞・放送部の生徒4名が協力して、「群馬県 NIE 実践指定校交流会」に向けた報告動画を制作した。日頃から校内新聞の制作に携わっている生徒たちにとって、プロの記者や編集者から直接伝授された「情報の取捨選択」や「読者の心に届く構成」といった知見は、これまでの活動を根本から見つめ直す大きな契機となった。また、動画制作の過程では、生徒一人ひとりがナレーション原稿の執筆や動画のカット割りや構成についても生徒たち自身で試行錯誤を重ねた。自らの手で言葉を紡ぎ、映像として再構成する作業を通じて、情報発信者に求められる責任感やジャーナリズムの精神を、より実践的な形で学ぶことができた。

### ④ 探究活動「新聞のみらいを考える」

2月上旬より、これまでの出前授業や本社見学で得た知見を基盤として、探究活動「新聞の未来を考える」を本格始動させた。生徒たちはグループごとに「若年層、特に高校生に新聞を普及させるにはどうすべきか」という難問に対し、具体的な解決策の模索を開始した。本活動において最も重視したのは、既存の固定観念に捉われない「高校生ならではの視点」と「自由な発想」である。自分たちの世代が日常で感じる違和感や潜在的なニーズを起点とし、それを具体的な施策へと昇華させるよう指導した。また、探究の質を向上させるため、本校では情報の検索に留まらず、教員や生成 AI を「思考の壁打ち（対話による思考整理）」の相手として活用する体制を構築した。特筆すべきは、教員が各グループの探究テーマや進捗状況に合わせてカスタマイズした専用 AI「Gem」を構築・提供した点である。これにより、生徒は自らのグループの文脈に即した、より精度の高いフィードバックを得ることが可能となった。その後実施した中間発表会では、教員や他グループの生徒から多角的な質問や意見が寄せられた。自分たちとは異なる視点からの指摘を受けることで、提案の実現可能性（リアリティ）や期待される効果を改めて客観的に見つめ直し、最終的な提案のブラッシュアップに向けた貴重な示唆を得ることができた。

### ⑤ 探究活動「新聞のみらいを考える」最終発表会

本プログラムの締めくくりとして実施した最終発表会では、高崎健康福祉大学人間発達学部の栗原教授、および上毛新聞社の清水氏、田中氏、須藤氏の4名をお招きした。各グループは、試行錯誤を経て辿り着いた「新聞の未来」への解決策を、スライドを用いてプレゼンテーションした。質疑応答で



は、教育と報道の第一線で活躍するプロの視点から鋭い指摘や温かい助言をいただき、生徒たちが自らの提案の社会的意義や実現可能性をさらに深く再考する貴重な機会となった。

この一連のNIE活動、および発表会での対話を通じて、生徒たちは単なる知識の習得に留まらない多くの学びを得ることができた。正解のない社会課題に対して自分たちなりの「答え」を導き出し、他者に伝えるという主体的な姿勢が大きく養われた。

### 3. 実践前後の変化、実践の感想、今後の課題

#### ①生徒の変化

実践前は、新聞を「受動的に情報を得る媒体」あるいは「自分たちの生活とは距離のあるもの」と捉えていた生徒が多かった。しかし、記者から直接「伝える技術」を学び、製作現場の熱量に触れたことで、新聞を「多くの人々の意志と多角的な視点によって構築された信頼の拠り所」として再定義する姿が見られた。特に、生成AI（Gem）を用いた壁打ちと、外部専門家へのプレゼンテーションを経験したことで、単なる事実の羅列ではなく「自分たちは社会をどう変えたいか」という主体的な問いを立てる能力（批判的思考力・課題発見力）に顕著な成長が見られた。これは、本校が導入しているAi GROWのコンピテンシー評価においても、特定の項目で成長の兆しとして表れている。

#### ②NIE活動についての生徒の感想

生徒の感想の一部を以下に記載する。

- ・今回のNIE探究活動を通じて、新聞が完成するまでに、多くの人々が関わっていることを知りました。記者の方々が取材先と交流し、強い想いを込めて記事を書く姿や、私たちの手元まで届けてくれる配達員の方々の仕事を知り、新聞という「紙」ならではの温かみを感じることができました。

- ・新聞記者の方のお話や新聞社見学など、普段の学校生活では得られない貴重な経験をすることができました。一連のNIE探究活動を通じて、社会の動きを捉える視点や情報をまとめる難しさを学び、自分にとって非常に大きな成長の機会となりました。

- ・記者の方から教わった写真の撮影技術は、とても勉強になりました。今回学んだ「撮影のコツ」を、これからの部活動（写真部）の撮影にも積極的に取り入れていきたいです。

- ・新聞の文章の作り方が、小論文作成にも応用できることを知りました。

#### ③実践者ご自身の感想

今年度のNIE活動は、本校の教育の柱である「総合的な探究の時間」で培った資質・能力を、社会のリアルな課題へと接続させる「応用実践の場」として位置づけ展開した。生徒たちは、情報の送り手であるプロの「熱量」と、最先端の「テクノロジー」の両面に触れることで、新聞という伝統的な

メディアを「自分たちの未来に関わる生きた教材」として再定義することができた。実践を通じて最も顕著だった変化は、生徒たちの視座の向上であると考えている。当初は新聞を「遠い世界の出来事を記した紙面」と捉えていた生徒たちが、取材の裏側にある信頼関係や、分単位の締め切りに挑む編集現場の緊張感を知ることで、情報の背後にいる「人」の存在を意識し始め、自分たちができる「新聞の未来」を描くことができた。本活動が充実したものとなったのは、多大なる献身的協力を仰いだ上毛新聞社の尽力に拠るものであり、ここに深く謝意を表す。